

下半期の「読み、書き、計算」

その学年特有の課題をピンポイントで

いろえんぴつ 岸本 ひとみ

○重要課題の洗い出し

小学校には、この学年で絶対身につけておかなければならない課題というものがいくつもあります。計算にしぼって言えば、

- 1年生・繰り上がり、繰り下がり計算
- 2年生・かけ算九九
- 3年生・余りのあるわり算
- 4年生・わり算の筆算 割る2桁、3桁
- 5年生・小数のかけ算、わり算
- 6年生・分数の加減乗除計算

となります。

これらは、下学年のものが身につけていないと、該当学年のものは全然歯が立たないようになっていきます。しかも、これができることが前提として、各種の文章題が作ってありますから、算数の学習時間の全体

がちつともおもしろくない、苦痛を伴う時間になってしまいます。

ならば、この課題を半年間かけて、じっくり全員に身につけさせることが、担任の大きな仕事ではないでしょうか。

○指導する側の計画性・持続力が問われる

高学年の算数指導の際に、最も悩まれるのが、小数の乗除算です。今回は、これを例に実践を紹介します。

①学習に入る前に実態把握

プレテストとして、2桁のわり算、2桁×2桁の計算、余りのあるわり算、678の段の九九、13―8型のひき算、をテストしてみます。（『アクティブ算数』に問題用紙が入っていますので利用して下さい。）

②つまづいているものから練習開始

多くの子どもが、4年生の2桁のわり算に誤答が見られます。中でも、「立て、かけ、引く、おろす」さんの、引き算でつまづきが見られます。


ということは、わる2桁の問題と、マス計算のひき算を1枚のプリントにして練習すればいいということになります。準備する時間がないのなら、朝の学習でマス計算のひき算、授業の最初5分で2桁のわり算というように2回に分ければいいでしょう。急がば回れと言いますが、このさかのぼり指導の手順を省くと、スイスイできる子どもと、全然手がつけられない子どもとの差が大きすぎて、それを埋めるような授業をしなければならぬこととなります。

ボンと6年を担任することの多い私にとっては、こんな差が大きいクラスでの算数授業は、サーカスの綱渡りをしているような状態と感じられます。教材準備、ノートの点検の時間もかなりのものです。さらに、授業中でも集中していないと、ひとりひとりのつまづきの違いにうまく対応できなくて、楽しい授業とはほど遠いものになって

しまいがちです。体力と気力の限界に挑戦する覚悟が必要になります。

③楽しいしかけを盛り込む

小数点の移動をするときに、「波乗りチャップン方式」「ピコン・シユワッチ方式」を取り入れたりして、楽しいと感じさせてしまいうことが必要です。



① $3.2 \overline{)7.68}$ 「ピコン！」

② $3.2 \overline{)7.68}$ 「ピコン！」

③ $3.2 \overline{)7.68}$ 「シュワッチ！」

$3.2 \overline{)7.68}$ 「たてる」「両手かくし」「7÷3は、2」
 $\underline{64}$ 「かける」「二二んが4、二三が6で64」
 $\underline{128}$ 「ひく」「76-64は12」

$3.2 \overline{)7.68}$ 「おろす」「8おろして、128」
 $\underline{64}$ 「たてる」「両手かくし」「12÷3は、4」
 $\underline{128}$ 「かける」「四二が8、四三12で、128」
 $\underline{128}$ 「ひく」「128-128は0」
 答え2.4

ロケット算数(フォーラム・A)より

前ツケ型

$7.2 \overline{)4.896}$ 「ピコン」
 $7.2 \overline{)4.896}$ 「ピコン」
 $7.2 \overline{)4.896}$ 「シュワッチ！」
 $7.2 \overline{)4.896}$ 「たてる」
 「48÷12は、0がたつ」とコールして、0を置く。

点ケス型

$0.47 \overline{)24.91}$ 「ピコン、ピコン」
 $0.47 \overline{)24.91}$ 「ピコン、ピコン」
 $0.47 \overline{)24.91}$ 「シュワッチ！」
 $0.47 \overline{)24.91}$ 「たてる」…
 最後に「ケス」と言って、商の小数点に斜線を入れて消す。

④できる→わかる→できる→わかる

理解と習熟の関係でいうと、この場合は原理が理解できていない子どもの方が、圧倒的多数です。小数で割ると答えの方が大きくなるのはなぜか、ささっと説明できる大人の方が少ないでしょう。教員だからこそ説明できると考えましょう。とりあえず、できるようにしておいて、

半年間の習熟期間を設定し、何度も原理を説明する機会を設け、そのうち理解できると気長にかまえます。

家庭学習の課題などで、週に一度は、小数のかけ算と割り算の問題を出すようにしていくと、忘れることが少ないです。

「え〜っ、またあ。」

という声が聞こえる方がいいのです。これを怠ると、6年生の担任は非常に苦しい。

子どもたちはもっと苦しむことになります。中学校の数学や理科教員のため息を誘うことになっていきます。

○できると思込ませる

小学生の年齢だと、「できる」と思い込めば、指導する側が予想もしていなかった好結果を出すことがけっこうあります。それを褒められ、好循環がさらに意欲を高めていくこととなります。5年生で、小数のわり算をマスターできた、という自信がそれ以外にも波及するのです。難しい課題こそ、極力全員ができるようにさせて、クラス全体の肯定感を高め、学習に向かう雰囲気醸し出すことが大切です。